

氏名(本籍)	都	づき	しげ	ゆき	幸(愛知県)
学位の種類	教育学博士				
学位記番号	博乙第184号				
学位授与年月日	昭和59年3月22日				
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当				
審査研究科	心身障害学研究科				
学位論文題目	聴覚障害児の単語の視記憶に関する実験的研究				
主査	筑波大学教授	教育学博士	岡	田	明
副査	筑波大学教授		草	薙	進郎
副査	筑波大学助教授		上	野	益雄
副査	筑波大学教授		湊		吉正
副査	筑波大学助教授		岩	崎	庸男

論文の要旨

本研究は、言語学習の視覚—運動回路に焦点をあてながら、聴覚障害児の単語の視記憶に関する基礎的な検討を行なうことを主要な目的としたものである。

先行研究を概観した結果、聴覚障害児にえいては、「単語」の習得及び理解の段階に特異な傾向がみられることや記憶遂行において一貫した結果が得られていないことがわかった。このような点を解明するためには、項目の連続呈示といった継時的な刺激呈示時における聴覚障害児の単語記憶を検討していくことが重要であると考えた。

本実験では、文字という入力情報が言語的に符号化される過程を(1)材料の属性、(2)体制及び個人の特性、(3)符号化を促進させるような教示効果、といった観点から検討することによって聴覚障害児の単語の視記憶の様相を明らかにしようとした。

実験1—aでは、系列項目の項目間特性と系列全体の属性に着目し、2音節文字を材料に用いて直後一括再生法によって検討した。その結果、聴覚障害児においては、系列リストに含まれる項目間の特性によってその検索利用の範囲が制限され、刺激の時系列特性に影響を受けているものと推察した。

実験1—bでは、系列項目のカテゴリー的要因及び文脈的要因に着目して、2音節文字を用いて直後一括再生法によって検討した。その結果、記銘材料の関係づけの基礎となる手がかり・知識の

体系の差異において聴覚障害児群と健聴児群とでは異なっていることを推察した。

実験2では、プローブ法を用いてリスト要因とプローブの型との関連から検討した。実験2-aでは、系列位置のプローブ、実験2-bでは、反応項目の系列位置を手がかりにそれと反応項目とを連合するようなプローブ、実験2-cでは、手がかりを2つ与えた複合的なプローブを用いて検討した。その結果、実験1で得られた結果と矛盾することなく、意味条件、形式条件、体制化条件という各々のリストの再生量に差がみられ、また、聴覚障害児群は健聴児群よりも劣っていた。これらの結果から、聴覚障害児は、項目間の機能的な関係を明確に認知しておらず、系列刺激に対する有利なストラテジーを用いていないものと推察した。

実験3-aでは、呈示順序によってひきおこされる体制化の観点から、漸増的呈示法と「1+n」呈示法の両者を用いて検討した。その結果、漸増的呈示法の方が「1+n」呈示法よりも再生量が多く、リハーサルにより再生は促進されたと言えるが、直接記憶範囲であるとも考えられた。実験2で得られた結果は、支持されたものの記銘材料のルール性と記銘方略との関係が課題として残された。

実験3-bでは、「1+n」呈示法による再生量の高低が、実験2で検討したプローブ課題の成績にどのように影響を及ぼしているのかを検討した。その結果、「1+n」呈示法の再生量の高い者は、どのプローブ課題においても正答率が高い傾向にあり、呈示順序に従って、系列内の構造的特性を統制する能力の程度に基づいて新しく呈示された項目と前項目との関係づけへの手がかりが規定されているものと推察した。

実験4では、系列的な刺激呈示事態において、聴覚障害児は、旧項目と新項目との処理単位としてどのようなものを用いているかについて、単語をベースとした逐語的な記憶を行なっているかどうかを検討した。系列の長さを規定する単位として「文節（項目）」をとりあげ、単語系列、文系列、文連鎖系列の再生量を比較した。その結果、単語系列と文系列の再生量がほぼ近似しており、文節が処理単位として機能していることが示唆された。また、文系列と文連鎖系列において、知能、言語的要因と何らかの関係が認められた。

実験5では、系列的に呈示した項目の再生時において、項目を指示して何らかの形で情報処理することにより意味記憶に変化が生じるかどうかを検討した。実験4で言語的要因が指摘されたので、記銘材料の概念に属する単語の連想量が、記銘の意図と情報処理の深さを操作された時にどのような効果をもつのかを検討した。その結果、実験5-aでは、記銘材料を意図させないで実験者の手がかりによってもう一方の属性を再生させる時に、単語連想量の程度が再生に影響を及ぼしていることが示された。実験5-bでは、30秒間の遅延時間を設定して検討した結果、この条件下において単語の連想量が効果をもたらすのは、実験者が記銘材料を意図させた時であることが示された。これらの結果から、聴覚障害児においては、実験事態で新たに項目が呈示された時に、それを処理していく様式を変更することが健聴児よりも困難であろうと推察した。

実験6から実験10までは、聴覚障害児の学習の構えをどのように変容させていくのかという点に着目して、記憶を促進させるべき要因の検討を行なった。

実験 6-a では、系列学習事態において物語文を構成することが再生を促進するかどうかを検討した。その結果、物語文構成活動による把持の促進は認められなかった。

実験 6-b では、自由学習事態において物語文構成による把持の促進がみられるかどうかを検討した。その結果、物語文構成活動による把持の促進は認められなかった。

実験 7 では、記銘語を含んだ文を呈示し、再認事態の検索過程における文脈効果を検討した。実験 7-a では、同一文脈条件、単語条件、異義文脈条件を再認条件としてとり入れた。その結果、同一文脈条件が他の条件よりも再認数が多く、文脈が異なると再認成績が悪くなるという文脈効果が示された。実験 7-b では、再認条件として、同一文脈条件、異文脈同義条件、異文脈異義条件をとりあげた。その結果、同一文脈条件と異文脈同義条件が異文脈異義条件よりもすぐれていた。しかしながら、この文脈効果は、記銘語の意味が変化しない場合に限ってみられるものであった。

実験 8 では、記銘語の数を一定にして、カテゴリ数とそれに含まれる単語数との関連をみながら、カテゴリ一名呈示が再生を促進するかどうかを検討した。実験 8-a では、カテゴリ一名呈示群とカテゴリを与えない群で比較した結果、カテゴリ数の要因よりもカテゴリ一名を与えるという再生の手がかり要因の方が記憶に影響を及ぼしていることが示された。実験 8-b では、カテゴリ数を一定にして手がかり再成効果が試行数によってどのように変化するかを検討した。その結果、手がかり再生群では、試行回数が増すほど再生数は多くなり、また、試行回数の変化よりも再生の際の手がかりの有無の変化の要因の方が再生により大きく影響を及ぼしていることが示された。

実験 9 では、再生時にカテゴリ一名呈示をすることのみならず、記銘以前に何らかの言語学習を行なわせることによって記銘の効果が上がるであろうと考え、先行経験としての文章化経験が促進効果をもつかどうかを検討した。実験 9-a の結果では、自由作文群や短文読み群のような先行経験としての文章化経験を持つ群の方がそうでない群よりも再生がすぐれていた。実験 9-b では、文章化せずに単語を別々に読む条件をとり入れたが、その効果は認められなかった。

実験 10 では、学習課題に対する一定の構えを形成させて、その際にとられるストラテジーと課題要因との関係を検討した。実験 10-a の結果より、意味リストの記憶においては隣接項目相互の直接的連合の成立が大きな役割を果しており、課題に有利なストラテジーで学習した場合には再生数が多くなるものと推定された。実験 10-b では、先行のストラテジーに対する意識性が後続のストラテジーに何らかの影響を及ぼしていることが示唆された。

審 査 の 要 旨

多くの実験結果により、聴覚障害児が目標志向的な態度や手がかり利用の技能が十分形成されていないこと、また、想起する際に何らかの外的な手がかりを与えると再生が促進されることなどを明らかにした点は高く評価できることである。これらの点は、従来の「欠陥対補償仮説論争」に

対して意味处理的な観点を導入していくことの必要性や従来の記憶モデルでは、情報検索過程のモデル化が十分でないことを明らかにした。また、本研究で得られた知見を従来の語彙指導との関連で検討した結果、ワードメソッドよりセンテンスメソッドの方が効果的であることも示唆している。

しかし、誤反応分析が不十分であり、また、学習過程も十分に分析されていない。聴覚障害児固有の心理的特性に着目した実験方法の開発も未開拓のままになっている。

今後の研究に待つべきものは多いにしても、本研究が聴覚障害児の記憶の一端を明らかにし、かれらの教育に貴重な資料を提供し、聴覚障害学の発展に貢献したところ大である。

よって、著者は教育学博士の学位を受けるに十分な資格を有するもので認める。